『彼女たちの革命前夜』

監督：フィリッパ・ロウソープ

出演：キーラ・ナイトレイ、ググ・バサ＝ロー、ジェシー・バックリー、グレッグ・キニア ほか

2019年／イギリス／107分

公式サイト

配信中

発売元・販売元：キノフィルムズ／木下グループ

© Pathé Productions Limited, British Broadcasting Corporation and The British Film Institute 2019

社会を旅する
シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

ミス・ワールドをみつめる 女性たちの多様性

アーヤ藍

現代においても議論が起きることが多い“ミスコン”。今では特技や個性、話術や社会貢献度なども評価のポイントだが、本作が描く1970年は「顔のかわいさ、脚の美しさ、3サイズ、“手付かず”の未婚であること」などが堂々と判定の基準になっていた。最たるものである世界大会「ミス・ワールド」は、月面着陸やサッカーW杯決勝戦より視聴者数が多い、家族向けの番組でもあった。本作は、女性解放運動の機運が高まる中、搾取の象徴であるミス・ワールドに対して抗議の声を上げ、妨害を企てた女性たちの実話に基づく作品だ。

物語は対照的なふたりの出会いから動き出す。ひとりは主人公のサリー。裕福な家庭で育ったインテリ系の女性でシングルマザー。母親と献身的な恋人の支えもあり、大学に入り直したばかりだ。もうひとりのジョーはヒッピーコミューンのひとり。街の看板の家父長制的な言葉をスプレーで書き換えたり、テレビは支配層を代弁するメディアだからと毛嫌いしていたりと、アナーキーなところもある。ふたりはさまざまなところで価値観が異なり、嫌味を言い合うシーンも多い。しかし「女性解放のため」という共通の想いのもと、互いの得意なことをもち寄り、ミス・ワールド妨害の計画を立てていく。

このふたりを筆頭に、本作は「女性の中の多様性」を描いている。たとえば主人公サリーの母親は専業主婦として家族に尽くしてきた。サリーにも何かと再婚をすすめ、「女性らしく」あるよう諭す。まだ幼いサリーの娘も、ミス・ワールドの出場者たちに憧れ、テレビに映る女性たちの真似をする。社会によって無意識に「女性らしくあること」を洗脳されていく娘の姿も、サリーを“革命”へと突き動かしていく。

ミス・ワールドの出場者たちも千差万別だ。男性に媚を売ることで生き残ることを選んでいる人もいれば、自由な人生の選択をするために賞金が目当てで参加している人たちもいる。さらに、当時人種差別反対の声も高まっており、「配慮」として黒人系の女性も選出されていた。そのひとりは自分が優勝することが、黒人系の少女たちに希望と自信を与えるはずだと語る。サリーたちが搾取の場と考えるミス・ワールドが、彼女にとっては自由を勝ち取る場なのだ。

そんなふうに「女性」とひと括りにできないほどさまざまな立場、背景、想いの女性たちがいることを本作は見せる。その違いが女性間の分断や対立を招くように見える場面もある。しかし、その生き方や価値観をもつに至る時代や社会的背景が必ずある。その時代や社会は男性中心で築かれたものだ。いわば男性によって生み出される女性の分断……。だからといって女性たちが自由になることは、男性から何かを奪うわけではない。サリーたちにミス・ワールドを妨害され、失意にうちひしがれる主催の男性に、妻がこう言う。「今夜は何かの始まりかも。でもあなたの終わりじゃない」。

エンドロールでは本作のモデルとなった人たちのその後と今の姿が紹介される。苦しい時代を味わい、それでもなお自分の人生を切り拓いた女性たちの美しさに、最後まで心を掴まれる作品だ。

あーやあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル（株）に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』（春眠舎）。